様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2015
課題番号：２３６１４０３１

研究課題名（和文）観光資源の社会学―世界文化遺産をめざす地域社会の取り組みより―

研究課題名（英文）Sociology of tourism resources; the local community aims at The World Cultural Heritage

研究代表者
今井　信雄（IMAI, Nobuo）

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：６０３７９４８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：地域の資源が「記憶」として残される際の社会学的方法論をモデル化した。それは「見られる」（文化を提示するプロセス）と「見る」（文化が提示されるプロセス）として成立する。「日常」―「非日常」と「制作」―「非制作」というマトリックスによって形成されるのが「見られる」モデルである。「過去と関連づけられた『媒介するもの』を経験することで過去を想像する」ことが「見る」モデルである。このふたつのモデルを経て、観光資源化が生み出されていくことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The sociological model was made how people remember as the “memory” when resource of the area is left. The model was concluded as "seen” (the process to which people reorganize culture) and "see” (the process to which culture is represented). The “seen” model is formed by a matrix as "daily life"-"non-daily life " and "production"-"non-production". The "see” model is that people experience "mediate" related with the past and people imagine the past.
It became clear that various culture becomes the resource of the sightseeing via these two models.

研究分野：社会学

キーワード：観光　資源　社会学　文化　モデル

１．研究開始当初の背景

研究開始当初の背景としては、２つ指摘できる。

ひとつめは、地域文化をめぐる競争的な状況である。世界文化遺産に登録されるためにはまず日本国内での選考を経て暫定リストに登録される必要があるが、2006 年から 2008 年の期間は、国内各自治体からの公募制によって暫定リスト入りが選考され決められていた。その制度の意味するところは、それぞれの地域が自分たちの「遺産」を発見し、申請するという必要が生じたことであった。やがて各自治体間での過当競争が起き、2007 年には鎌倉市で公文書の偽造が発覚するなど「文化」を巡る地域間競争が過熱していた。

研究開始当初は、その地域間競争をもたらした公募制の制度が終わった直後であり、暫定リストに掲載された各地域は世界文化遺産に登録されることを目指し、また、暫定リストに掲載されなかった地域は、その文化資源を生かしたまちづくりを模索するようになっていた。

ふたつめは、日本から新たに世界文化遺産として登録されない期間が続いていたことである。2007 年に「石見銀山遺跡とその文化的景観」が世界文化遺産に登録されて以降、暫定リストからの世界文化遺産登録がみられていなかった。世界文化遺産の登録が抑制される方向性が打ち出され、国内の文化遺産を巡る状況は、世界文化遺産の登録を目指しながら、おそらく登録は困難との認識をもっていた。そのような中、暫定リスト入りをした地域は、一方でグローバルな文化的尺度である世界文化遺産を目ざしながら、他方でローカルな歴史の再編をさまざまな目的に沿わせながら進めていくという状況であった。

２．研究の目的

公募制終了後、暫定リストに掲載された各地域で起きていたのは、地域の歴史の再編であった。各自治体はみずからの過去を、暫定リストに掲載された文化的な資産との関わりの中で再定義する必要があった。

また、それら暫定リストに登録された地域の多くが、地方都市圏に位置し、地域経済への何らかの貢献を期待し観光まちづくりを意図していた。そのとき、地域の文化的な資源が、「観光」資源となる過程に何が起きているのか、どのような「文化」の現れ方の変化が起きているのか、ということを明らかにすることが目的であった。そのようななかで、研究計画開始当初に想定していなかった状況がふたつ起きた。

ひとつは 2011 年に起きた東日本大震災であり、もうひとつはその震災が起きた 2011 年から相次いで暫定リストから世界文化遺産に登録されていったことである。後者は前者とも連動している側面があると言え、2011 年登録の「平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群―」は、被災地における世界文化遺産登録であるという点で、大震災からの復興の意味を担っていたと言える。

そこで、本研究は、暫定リスト入りから世界文化遺産登録に至る文化の意味づけがどのように変化していくのか、ということに照準し、研究の目的を設定することとなった。その際、「平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」が東日本大震災からの復興という役割を持っていたように、災害などの出来事も含め、過去の歴史的出来事がどのように伝えられ、観光資源化されるのか、ということを社会のしくみとして提示できるモデルを提供することを最終的な目的として計画することとした。

３．研究の方法

研究図書のほか、地域社会での資料収集、および関係者へのインタビューを行った。地元図書館での郷土資料の収集や地元紙のデータベース閲覧および複写によって、暫定リスト入りした前後の地域の動きを情報収集することとした。また、対象となる遺産を取り上げた雑誌やパンフレット類、ならびに官公庁からの報告書を購入または複写し、あらゆる角度から対象の取り上げられ方を考察した。

４．研究成果

本研究成果として地域の資源が「記憶」として残される際の社会学的方法論を、共著の書籍と日仏社会学会年報の所収論文によって提示した（山口大学時間学研究所編 2015 および今井 2015）。前者の成果は＜文化を提示する側＞としてのモデルであり、後者の成果は＜文化を受け取る側＞のモデルである。いずれも、東日本大震災以降の問題意識を共有し、災害の記憶継承の問題を扱いながら、文化の観光資源化の過程にも通底する、「現代における集合的記憶論の社会学的枠組み」をモデルとして提示した。前者は「文化」をストーリーとして提示する側の社会的な過程について捉えることとして、また、後者は「文化」が提示される側にとっての社会的な過程について捉えることとして、ここで報告することができる。

以下、（１）および（２）において、ふたつの研究成果の内容が観光資源化の過程においてどのような意味を持っているかということについて報告し、（３）では、今後の研究の発展性について述べる。

（１）見られる―文化を提示するプロセス

観光資源となるということは、その文化が

ある枠組みのなかでストーリーを与えられ提示されるということを示しているが、その枠組みを文化人類学者ジェイムズ・クリフォードの考えに依拠し説明する。クリフォードの「芸術―文化システム」理論は、「真正」（authentic）か「真正でない」（inauhentic）かという軸と、「傑作」（masterpiece）か「器物」（artifact）かを掛け合わせることで、世界のさまざまな文化が価値づけられ、見る－見られるという関係性のなかに置かれる過程を示したものである。

ここから学術的示唆を受け、文化が価値づけられていく観光資源化の過程を次のように示すことができる。本研究で着目したのは文化を収集しその意味を価値づけるこのマトリックスのシステムは、過去の文化を表象する際のマトリックスとしても機能していることである。それは、過去の複数の出来事をつなぎあわせ、一つのストーリーを提示する。

「日常」的な文化的資源と「非日常」的な文化資源の軸と「制作」された文化的資源と制作されていない（「非制作」の）文化的資源の軸を掛けあわせマトリックスを構成したとき（図１）、そこに資源化のアリーナが形成されていることがわかる。世界文化遺産に登録されるためにはいくつか基準があるが、最もわかりやすいのは「非日常」―「非制作」のマトリックスである。登録の基準となる「傑作」が「非日常」として、「真正性」や「完全性」が「非日常」として位置づけられ、ここに対象となる資産の意味が社会学的に跡づけられる。たとえば、2013 年に登録された「富士山――信仰の対象と芸術の源泉」はここに位置するだろう（イコモスからの勧告で、海岸防波堤や店舗・売店、あるいは開発規制など多くの対応の必要性が指摘されているが、その内容はこの軸に沿う方向性を示している）。

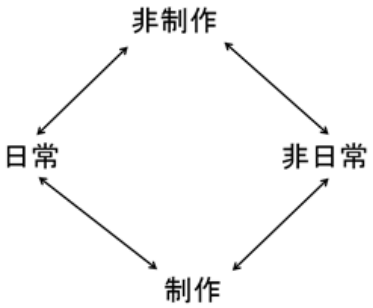

図1

非日常に対して「日常」もまた対象となる。2014 年の「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、日常生活のなかにあった資産であり、この軸を最もよく示している。そして、世界遺産の真正性を示す「非制作」に位置する。

世界文化遺産がそもそも「真正性」「完全性」を基準として持つのであれば、図１のマトリックスにある「制作」とはどのような意味を持つものか。それは、登録された世界文化遺産の意味や意義を、観光客に伝えるような施設やしくみが「制作」されていくことを指している。2015 年に世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」は、構成資産そのものはいずれも「非制作」つまり真正性・完全性をあらわすものであるが、たとえば萩博物館や大牟田市石炭産業科学館など、近接する博物館や資料館などで、その資産がもつ「意味」を伝える施設が観光資源化というアリーナの一部を形成する。これが「制作」の軸を形成している。そして、さまざまな資料や解説などを経てその歴史を伝える仕組みを「日常」として、バーチャルな映像を駆使し体験学習の施設を備えている場合に「非日常」として、位置づけることができるだろう。

本研究において、このマトリックスの一部分だけを位置づけられるのか、複数を位置づけるのか、それによって、観光資源化のアリーナが形成され、変化することがより明確に捉えることができる。ただし、変化の具体的な内実については、今後の発展的な研究を計画しそこで明らかにしたい。

（２）見る―文化が提示されるプロセス

前述の研究では、文化を提示し、ストーリーを伝える側のマトリックスを明らかにしたのに対して、それら文化を提示される側のプロセスは次のように記すことが出来るだろう。

世界文化遺産は、ある文化を通してその文化を担う集団や地域の過去を提示する。それはその地域の「記憶を伝える」作業として捉えられる。記憶を伝えるという社会的営みの内実は、過去と関連づけられた何らかの「媒介するもの」を経験することで過去を想像することである。そして、その場での経験もまた記憶される（図２）。

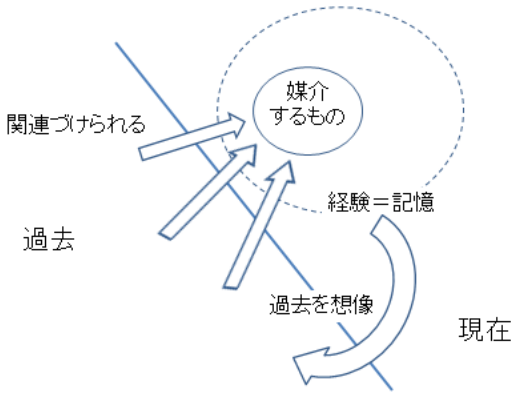

図２

ここで「媒介するもの」というのは，（その文化資産に関連する）過去に関連づけられることで、過去と現在とを媒介する手段となるものである。たとえば、「富岡製糸場と絹産業遺産群」の「富岡製糸場世界遺産伝道師協会」の「語り部」ボランティアなども該当するだろう。その人たちによって子どもの頃の経験が語られることは、富岡製糸場の歴史の一部を形成している。つまり、構成資産を目の前にするだけではなく、ある人の記憶を語ることで過去と現在が媒介されることもあるのである。

そしてその文化的な資産を解説する施設などもまた、過去と現在を媒介する役割を担っている。これは日常的に公開されるという点において、（1）で示した「非制作」の軸に位置づけられるものであるが、これら媒介するものによってなされる経験は、「聞く」ことや「見る」ことなどの経験として記憶される。これらの経験は、単なる情報として伝えられる内容をはるかに超えた何かを、身体を通して伝えられるものに残す。いわば「身体性」を伴った経験として記憶されるのである。

過去と関連づけられた何らかの「媒介するもの」を手段として、身体性を伴った経験を記憶し過去を想像する、というプロセスを仮に「（過去と現在との）媒介経験」として捉えておく。この媒介経験が重要なのは、その個別の経験こそが、ある過去が事実であることの確信を生み出すからである。

またさらに、「写真を見る」ことは「媒介経験」として過去を想像させることになる。「写真」としてどのように映すことができるのか、ということもまた、世界文化遺産の意味を伝える際の、重要な側面を表している。

そもそも人は写真によって、自らの経験を想起し、社会的な出来事（としての過去）を想像する。この過程を「時間」という観点から捉えると次のように言える。われわれが写真を見るとき、そこに映された対象は「過去」であり、見ているものは「現在」であるという「対象」と「みる者」の超えられない時間軸の位置の違いが生じている。写真に映し出された対象は、その時間軸が失効されており（過去としての）瞬間のままの存在として捉えられる。言い換えれば、写真を見るとき時間の区切りが生まれているということである（図３）。

それに対し、われわれの世界では時間軸を止めることは不可能である。現在は一瞬であり、すぐさま過去になっていく。それと同時に、別の認識として現在や過去が時間的な幅を持って認識されている。たとえば「今は不景気だから」という場合の時間の感覚は、瞬間としての「今」を含んではいるものの、景気が良かったとされる時代から後の、数年や十年以上の期間を含んでいる点で、かなりの時間的な幅をもった「現在」が感覚されているということになる。

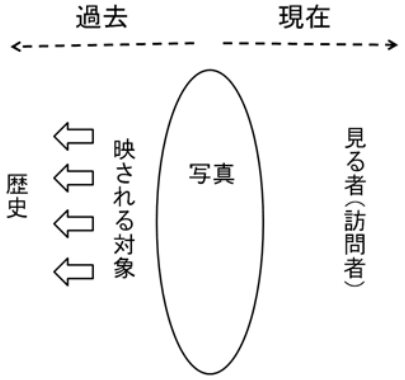

図３

（1）で示した文化が観光資源化されるさいのアリーナにおいて、写真は非常に重要な役割を持つ。その世界文化遺産に関わる過去の歴史的な出来事を最も伝え得る方法は写真なのである。このような時間と写真のとらえ方を踏まえ、世界文化遺産を目の前にし、語り部やさまざまな施設を訪れたときに、その訪問者は、その対象が示す過去と、そこを訪れた個人的な経験とが結びつくことになる。それは、「今」という時間の軸から切り離された歴史としての「過去」の延長線上に、訪れた人の個人的な経験が重ねられるということである（図４）。これこそが＜見る―文化が提示されるプロセス＞の帰結であると言えるだろう。

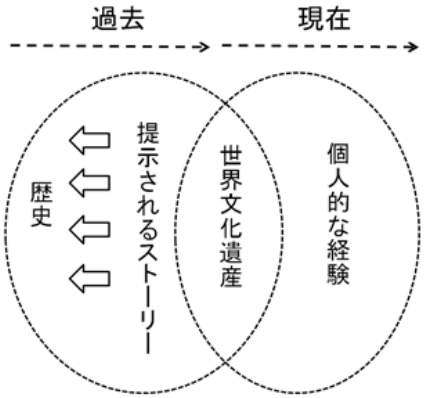

図４

（３）文化の相対化と本質化

ここまで、本研究の研究成果を示してきた。文化が観光資源化するさいに、マトリックスのなかに位置づけられ、「日常」―「非日常」、「制作」―「非制作」という２つの軸によって観光資源化のアリーナが形成される。そのアリーナを訪れる訪問者たち（＝観光客）は、過去としての「歴史」を感じつつ、その延長線上に自分の経験を位置づける。

観光資源化の過程とそれを受け取るプロセスは明らかになったとして、残る課題は、

それ以前からのプロセス、つまり、（１）のマトリックスに位置づけようとする人々の社会的営みと、それに続く社会的な営みとしてアリーナの中でどのように文化が変化していくのか、ということである。これを今後の研究の課題としてあげておく。

現時点でそれは「相対化」と「本質化」というキーワードで捉えることができると考えている。「相対化」とはその文化遺産の意味や意義が、その時代的な状況に応じて変わっていくことである。たとえば「富士山――信仰の対象と芸術の源泉」が世界遺産登録される以前の状況では、その構成資産のひとつ「三保松原」はユネスコから除外の勧告を受けていた。各自治体や関係者はユネスコからの指摘を受け、それに応じた歴史のストーリーの構築が模索されていた。しかし、登録された際には、三保松原はその構成資産として登録されることとなったのである。これは、歴史がその時々の状況に応じて「つくられている」という意味で「相対的」であることを示している。

ただし登録された後は、そのストーリーは変えられることはなく固定化し、「本当」の歴史となっていく。その意味で「本質化」の過程をあらわしていると言える。

以上のように考えると、観光資源化のアリーナを形成し、位置づけられていく過程の中で「相対化」と「本質化」の両方の側面から文化資源を捉えることが重要だと言えるだろう。今後はこのような枠組みから、世界遺産以前の文化の形態から世界遺産登録までの文化の形態にいたる、文化変容のダイナミクスを捉えていきたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１　件）

①今井信雄「均質化する災害の記憶？」『日仏社会学会年報』第 26 号、2015 年、7－16 頁。査読なし。

〔学会発表〕（計　０　件）

〔図書〕（計　１　件）

今井信雄他、山口大学時間学研究所（編）『時間学の構築Ｉ』（第７章「『記憶を伝える』とはどういうことか？」執筆分担）全 235 頁（175－190 頁担当）、2015 年。

６．研究組織
(1)研究代表者
今井　信雄（IMAI, Nobuo）
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：60379485